



「住吉」の断崖（手前は“馬鹿試し”の約4億年前の石灰岩）

一の鎖



修験道の行場 —住吉—

かつて横倉山は、「三嶽山」と呼ばれた時期があった。それは、この山に三つのごつごつとした険しい崖・岩場（嶽）があったためである。東から「カブト嶽」、「馬鹿試し」、「住吉」の三つで、古くはそれぞれ“日向の嶽（または日受の嶽）”、“日室の嶽（または玉室の嶽）”、“日置の嶽（または日暮の嶽）”と呼ばれた。これらは、800年以上も昔から土佐国唯一の修験道の霊場として栄えた、大和大峰山熊野系の「横倉山修験道」の主な修行の場（行場）に当たる。“日室の嶽”に立つ安徳天皇を祭神とする横倉宮が明治4年までは「金峯山熊野権現」と呼ばれていたことからそのことが伺える。

さて、三嶽のうち一番西に位置する行場の「住吉」には、修験道当時の名残として、崖の先端に至る20^{メートル}以上もある鉄の鎖が今も残っている。「鎖禅定」と言って、修験道の霊場には必ずこの種の場所（行場）がある。「住吉」の場合、鎖は明治時代以前^{※1}に寄進されたものであろうか、最初の長い鎖（一

の鎖）の一本一本に、『尾川村 忠次 松次……』『日下村 万吉 久万太郎 常次……』などの寄進者と思われる名前が刻まれている。鎖をつたって鞍部に下りると、さらに小さな岩場に架かった一段短い鎖（二の鎖）^{※2}があって、それを上って崖の先端に行けるようになっている。頂上には安徳天皇の従臣・花山院中納言兼政を祀った「住吉神社」の祠があり、その裏は、目くらむような断崖絶壁で、正に「覗き」の行場（捨身行）にはふさわしい場所である。

ちなみに、「カブト嶽」にも鉄の鎖が残っているが、住吉のものとは異なり寄進者名の刻印はない。「馬鹿試し」には鎖はなく、その代わりに、『保安三年』（1122）銘の入った四国最古の経筒を含め5口の経筒が見つかっている。

※1…名前のみで姓がないので江戸時代のものなのかもしれない。
※2…10月22日に行った時、この鎖はなかった。昨年の北京オリンピック開催前に全国的に鉄製品の盗難が相次いだ、これもその一つなのだろうか……。



“旅するチョウ” アサギマダラのナゾを追って

山崎 三郎

アサギマダラは、日本の蝶の中で唯一、海を渡って遠くまで移動するチョウです。ゆったりと優雅に舞うその姿は、初めて出会った人をも惹きつけて放しません。

そればかりか、その行動や移動経路、生態にはまだまだなぞが多く、不思議でロマンに満ちた姿がこの蝶の魅力で、夢を託す研究者やマーキング仲間が多いのも肯けます。

横倉山自然の森博物館では夏の昆虫観察会として、アサギマダラのマーキング会を平成19年から、いの町（旧本川村）の寒風山山麓で行ってきました（不思議の森から Vol.19：5, 2008）（21年度は天候不順のため中止）。

そこで、観察会をふり返りながらアサギマダラの不思議に迫ってみましょう。

★なぜそんなに遠くまで旅するのか—第1の謎

春には、沖縄や鹿児島県の南西諸島で成虫になったアサギマダラが海を渡って、私たちの住む四国にやってきます。そしてさらに、本州に向かって北へ北へと移動して行きます。しかし北上個体の確認はまだあまり多くありません。2006年5月、高知県では大分県姫島からの2個体（山崎、本山 asagnet）、さらには一昨年の7月27日の当館マーキング会の同じ場所で、台湾の陽明山から旅してきた本邦4例目の個体が寒風山で見つかります（土居経典 asagnet）。

また、どこからの飛来かは不明ですが、5月下旬～6月上旬には鶴松森—不入山—帯のオオルリソウに成虫が多く見られます。

夏になると、成虫は四国山地を中心に1000m以上の山や高原に移動し、9月下旬までここで過ごします。

7月中旬から8月上旬にはヨツバヒヨドリが群生している瓶ヶ森林道や寒風山山麓に多く見られるほか、ヒヨドリバナの花が早く咲く天狗高原、不入山、鳥形山などでも多く、ハンカイソウの花が一面に咲く放牧場でもアサギマダラが優雅に風

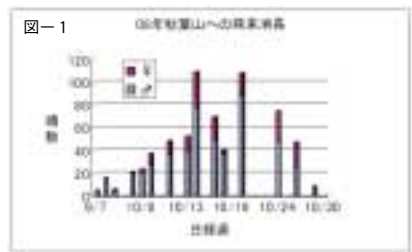
にゆれています。

そして秋になると、山地で生まれた成虫は里山に下り、南の島へと旅立って行きます。その距離は実に300kmから2000kmにも及びます。

旅立ちの条件としては、気温の上り下りが深く関わっているとはいえ、もっと大きな原因、つまり体の中にそんな“指令”（北に向いなさい！南に帰りなさい！）を発するDNAをずっと大昔に獲得し、それに突き動かされているのかもしれないね。

ちなみに、北米大陸のオオカバマダラは実にメキシコ—カナダ間の3000kmの旅を成し遂げていることで有名です。

これまでアサギマダラの秋の南下個体は、高知県では室戸岬や足摺岬～大月町（大堂）が集



結地として知られていましたが、私達の6年間の「高知アサギマダラ研究会」の調査で、秋葉山（龍河洞）山塊一帯や物部川流域での集結や横浪半島～佐賀町にいたる海岸線などでの集結も確認され（図-1）、これまでに石川・長野・福島・岐阜・山梨・和歌山など本州各地から渡ってきた個体がたくさん見つかります。

高知県にやってきたアサギマダラは、中継地であるこれらの場所でたっぷりと花蜜を吸って、次には海を超えて屋久島や喜界島、与論島、さらに沖縄の最南端に近い石垣島や南大東島まで飛んで行きます。

その意味でも、高知県がアサギマダラの北上・南下の移動経路として重要な役割を果たしていることがわかってきました。しかし、まだその確かな経路も、なぜそんなに遠くまで旅するのか、そのメカニズムについてはよくわかっていません。多くの人たちのロマンをかきたてるのもこの辺り

にありそうですね。

★生態の不思議－第2の謎

幼虫はその体に鳥や動物から嫌われるといわれている「PA（ピロリジジナルカロイド）」という毒成分を持っていることです。

冬から春にかけては、海岸線に近い暖かな場所に生育するキジョラン（ガガイモ科のつる植物）で育ち、夏には、同じガガイモ科のイケマ（同上）やカモメズルで育ち、5齢で蛹〔右上写真〕となり、合計1～2ヶ月ほどで第2世代が発生します。

成虫は同じアルカロイドを持つヒヨドリバナやフジバカマ、ツワブキなどおもにキク科の花の蜜を体に蓄え、それを生殖活動や仲間との連絡をとる誘因フェロモンに、あるいは敵に対する警報フェロモンなどにもすることが知られています。

そして、これらの花蜜をお腹一杯吸収し長い困難な旅に備えるのです。つまりアサギマダラにとって、この毒成分は旅をしながら生きていく上で必要不可欠な成分だといえますが、まだまだその成分と機能については謎がいっぱいです。

成虫の習性も日中の気温が25度を超すようになると気温の低い高い山へと移動して滞在（避暑）し、山の気温が下がってくる9～10月になるといっせいに暖かな里山に下りてきます。そしてさらに南の地方、島嶼へと移動して行くのです。

★本当に長距離移動だけか－第3の謎

これまで春は南西島嶼から北上し、秋は本州から南下すると述べてきましたが、これまでの四国での詳細な調査から、四国だけでも年間の世代交代が繰り返されているのではないかとこの大きな疑問を感じています。

それはひとつに、春でも秋でも羽化したばかりの新鮮な個体が多く捕獲できることや四国山地でも本州並みの高度と自然環境が揃っていて、食草も十分補給できることなどで、今後さらに調査を進めたいと思っています。

★南国育ちが北上を続けて－第4の謎

昔は南国性のチョウであった本種が、最近では北海道の函館にまで渡っていくことがわかってきました。クマゼミなどと同じように、南国性の昆虫たちが次第に北へ北へと上って行っていることがわかってきていますが、それは今問題となって

いる地球温暖化の影響とも関係しているのではないかと心配されています。



小さないのちを精一杯はばたかせて旅するアサギマダラをみつめながら、すべての昆虫や生きものたちと共存して住めるバランスのとれた森と自然を守っていくことの大切さを考えていきたいと思います。

★アサギマダラのマーキング裏ワザ

- ①身の回り：白系統のシャツできめるといいが、空色などの模様のものにも近寄ってくる。スズメバチも注意して黒はタブー！ヘビやダニを防ぐため長靴または靴下を外にしてズボンを含むといい。
- ②秘密兵器？：飛んでいるアサギマダラを呼び込むのに白いタオルをふりまわすとゲットできる。
- ③網：なるべく口が広くて袋が長いもの（釣り上げた魚をすくいあげるふりだしアミに虫アミをつける）が効率的。
- ④採り方：あわてずゆっくり近づき、アミを下からすくいあげ、アミを一巻きして出口をふさぐこととトゲのある植物や太い枝に、引っ掛けないよう気をつける。
- ⑤マーキングの仕方：細い油性サインペンを使って翅の空白のスペースに書く（最初に自分の記号と番号を書き、次に場所と月日を記入する。例：SN-1110（下ばね）、アキバ 10/15（上ばね）。
- ⑥出現する時間：早朝7時頃から11時頃までが多く、午後3～4時頃でも見られる。
- ⑦集まる場所：日影になっている林道ぞいでヒヨドリバナやアザミ、ツワブキなどが咲いている場所を見つける。しかし日当たりの強い道にはあまり出てこない。
- ⑧マーキングメモ：再捕獲時のため、オス・メス、翅の長さ、健康度、⑤の記号などをメモしておくこと。

マーキングに参加されると、読者の皆さんもきっと、いのちの不思議と自然のすばらしさにすっかりとりこになり、惹きこまれてしまうこと請け合いですよ。

（やまさき さぶろう／森の回廊・四国をつくる会副会長・高知県自然観察指導員）

貝の歴史と進化

安井 敏夫

貝類は、殻をもつ軟体動物のことを指し、大きく分けて「巻貝（腹足類）」、「二枚貝（斧足類）」、その他に分類される。その他の貝類には、イカやタコなどの頭足類のうち貝殻をもつもの（オウムガイ、カイダコ、タコブネなど）とツノガイのような掘足類が含まれる。

貝類は、世界中に約11万種もあり、昆虫に次いで種類が多い。中でも、サザエで代表される巻貝は、約8万5千種もあり、ハマグリやアサリなどの二枚貝の2万5千種をはるかに上回っている。

巻貝は腹足類に属するが、腹足類の中には殻をもたないもの（例：ナメクジ）や触角・目を欠くものもあるなど多様性に富む。殻をもつものでは、大部分が右巻きであるが、左巻きもある。

腹足類は、明かなものでは古生代のカンブリア紀前期〔約5億4000万年前〕に出現し、オルドビス紀以降に繁栄し、中生代後半から種類・個体数が急増している。生息域は、当初は海生のみであるが、世界的にシダ植物が繁茂する石炭紀頃から淡水域や陸上に進出した。現在では、水深5000mの深海から標高6000mの高山にも生息している。



斧足類は、腹足類と同じカンブリア紀に出現し、化石種も多く、現生種は約2万種に及ぶ。大部分は海生（浅海生）であるが、淡水生のもも少なくない。

掘足類は、オルドビス紀に出現し、現世に至っており、特に新生代第三紀の海性の地層から化石が多産している。

さて、高知県の場合、土佐沖には暖流の黒潮（日本海流）が北東に向かって流れていることもあり、全国で沖縄に次いで貝の種類が多く、“貝の宝庫”と言われている。現在約2500種の貝類が確認されており、学術的にも貴重な場所と言える。特に、1939年には土佐沖で、世界的にも珍しく高価な貝で“生きた化石”としても知られる「リュウグウオキナエビス」（オキナエビス科：“長者貝”〔写

真〕）が世界で2番目に発見されるなど、古くから珍しい貝類の報告がある。また、土佐ならではの貝として、14世紀に 尊良親王（後醍醐天皇の第一皇子）が土佐に流された際、その妃を京の都から呼び寄せようとしたが災難に遭い会うことができず、妃の着ていた小袖の紋様が貝に焼きついて入野浜に打ち上げられるようになったという伝説の“小袖貝”（コタマガイ；ハマグリの一種）がある。

越知町横倉山のシルル紀〔約4億2500万年前〕の石灰岩からも巻貝や二枚貝などの貝類の化石が見つかってはいるが、クサリサンゴや三葉虫などでは多くの種類が分類されているのに対し、報告例はほとんどない。特に、この時代には二枚貝は

まだ十分分化しておらず、発見された固体自体極めて少ない。一方、オウムガイ類の「直角石」（“直角貝”ともいう）は、日本では横倉山が最も多く産する。

日本最古の植物化石・リン木類を含む大平地区のデボン紀〔約3億6000万年前〕の地層からも貝の形をした海生の腕足類の化石が産出しており、このことから、植物は自生していたものがその場で化石となったのではなく、川によって運ばれたものが海底に堆積した流木であることがわかった。

一方、横倉山には石灰岩が分布しているため、全国的にも龍河洞や旧土佐山村（共に石灰岩地）と並んで陸産貝類の生息地として有名であるようだ。横倉山産の陸産貝類としては、日本最大の陸産貝



であるアワマイマイ（“カタツムリ”の一種）やヤマクマガイの他、キセルガイの仲間のフルトンギセル、イイジマギセル、ナカムラギセル、アズママルクチコギセル、キセルガイモドキ、それに、日本で最も小さい部類の巻貝のベニゴマオカタニシなどがある。

横倉山では、高知県内で生息が確認されている

陸産貝類約150種のうちの3分の1に当たる約50種が見られるようであるが、これは県内における植物の場合とほぼ同じ割合であり、横倉山は“植物の宝庫”であると同時に“陸産貝類の宝庫”でもあると言える。

（やすい としお／横倉山自然の森博物館学芸員）

博物館ニュース

夏休み企画展：『土佐の貝—その美と魅力—』

〔2009年7月18日（土）～9月6日（日） 協力（資料提供）；四万十町教育委員会・NPO砂浜美術館・高知大学理学部海洋生物学研究室・浅見化石会館〕



高知県は、太平洋に面し海岸線が700kmと極めて長く、また、暖流「黒潮」の影響もあり、約2500種の貝類が確認されており、国内では沖縄県に次いで貝類の種類が豊富なことで知られている。

今回は、故・朝日良隆氏（旧窪川町）の1千数百点にも及ぶ膨大な『朝日コレクション』を中心に、一部『大西正幸コレクション』を交え、高知県産の貝類約1,000点を一堂に展示し、高知県の貝類について、その多様性、色・形の美しさや不思議さなどの魅力について鑑賞してもらう。また、古代中国では、古くからある種の貝を貨幣（貝貨）として使用されたり、県内の縄文人もペンダントにしており、装飾品・遊具等にも幅広く用いられなど、人間との関わりも深いことについても認識してもらう機会とする。

『関連イベント』として、「貝を使った工作教室（2回）」「もちより貝談」を開催する。

企画展の主な感想として、「数の多さと美しさに驚きと感動を覚えた」「形・色・模様、どれをとっても不思議です」「自然の美しさに心打られました」「こんなにたくさんの種類の貝が見られて驚きです。海へ行ったら探してみます」「『貝合わせ』おもしろかったです」などがあった。

〔昆虫教室〕

天狗高原（四国カルスト）で「アサギマダラの観察とマーキング・放蝶」を行う予定であったが、天候不順のため中止。

〔植物教室〕

—「森のしくみと植物のはたらき」について—

〔2009年8月2日（日）；講師：大倉 浩典（元高知中央高等学校教頭・植物研究家）、参加者：小人4名、大人5名〕

横倉山第3駐車場から遊歩道沿いの樹齢数百年のアカガシやウラジロガシなどを観ながら、植物・森の観察を行う。

自然（植生）が豊かだからいろんな動物が生活できる—



“森は動物のマンション”。山の土は水や空気を貯める大事なはたらきをし、降った雨が一気に流れ出さないように調整している—“森は自然のダム”。植物の葉の裏から水分が蒸発していて、そのため熱を吸収するので森の中は涼しい—“森は自然のクーラー”。木々の葉からはいろんな匂いを出していて、それが殺菌や健康にいい—“森林浴”。森には実にいろんな作用がある。

一方、植物は動物と違い、自分から動いていってえさを捕ることはしないが、水と二酸化炭素から光のエネルギーを借りて、葉の細胞の中の葉緑体という“工場”でブドウ糖を製造するというすごいはたらきをしている。

この他、生卵を濡れた新聞紙とアルミホイルで包み、火の中に入れて温めてゆで卵を作る、「鍋のいらぬゆで卵の作り方」も教わり、充実した教室であった。

〔工作教室〕

—「オリジナル万華鏡作り」—

〔2009年8月9日（日）；講師：橋本 優（リサイクル万華鏡協会）、参加者：小人5名、幼児1名、大人5名〕

今年も、すっかり定着した、刻一刻と模様（景色）が変化していく“オリジナル万華鏡”作りを行う。基本的な形・原理は変わらないが、年毎にどこか少しずつ改良が加えられ改善されていく。今回は、先細りの反射ミラーを3枚二等



辺三角形（頂角：37°）に組み合わせのものを用いた。ミラーを接着剤ではなく紙製のリングで固定したため製作はわずか1時間で全員終了した。

余った時間、いろんなタイプの万華鏡の観察を行った。2枚のミラーとビーズの代わりに車のフロントガラスの割れたものを用いた“雪の結晶”、鏡筒を倍近く長くした“夜空の星”、さらには、水を張ったタンクに色とりどりの紙片を入れてエアポンプで攪拌し、ビール・コーラのアルミ缶を鏡筒にしたいかにもリサイクルでユニークな万華鏡などがあった。“雪の結晶”の観えるものは、子どもだけでなく母親にも人気があったようだ。工夫次第でいろんな万華鏡ができ、実に“夢がある”ものだと感心した。

それにしても、かつてヨーロッパの貴族などの金持ちが、ダイヤモンドやルビー、サファイアなどをビーズ代わりに入れて楽しんだという豪華な万華鏡を一度観てみたいものである。

〔化石教室〕

〔2009年8月23日（日）；講師：安井敏夫（横倉山自然の森博物館学芸員）、参加者：小人9名、大人7名〕



今年も、昨年同様、中生代三畳紀〔約2億2000万年前〕の示準化石・モノチス（二枚貝）の化石採集を行う。

モノチスは、現生のホタテガイの先祖型に当たる薄い皿型の扁平な左右非対称の殻から成り、顕著な放射肋をもつのが特徴である。砂質泥岩～細粒砂岩中に密集して産し、今回もできるだけ自然を破壊しないように露頭直下の転石（割石）中から採集することにした。それでも、参加者の中には完全な個体を採集できた者もいた。

最後は、いつものように、化石の整理・保存の仕方と化石採集の注意とマナーを伝えて解散とする。

《貝を使った工作教室》

〔2009年8月8日（土）；講師：武田善臣（クラフト作家）、濱松英彦（ビーチコーマー）参加者：小人11名、幼児1名、大人10名；22日（土）；講師：同、参加者：小人7名、大人7名〕

空き瓶に紙粘土を巻き、それに貝殻を埋め込んだ「えんぴつ立て」、額縁に貝殻を貼り付けた「フォトフレーム」、サンゴの骨格にカラフルな貝殻を花のように散りばめる「サンゴの樹」、そして、大小の貝殻を頭・手足に見立てて接着して作る「カメ」の4種類の作品の製作を行う。それぞれに、きれいなもの、かわいいものができる、夏休みの自由研究・思い出となったようだ。

《もちより“貝談”》

〔2009年8月22日（土）；参加者：大人6名〕

各自の貝のコレクションを持ち寄って展示・公開し、気軽に意見交換・議論し合う“ネイチャーサロン”というスタイルの展示会を熊沢秀雄氏（高知大学医学部）の提案で開催する。

2回に分けて膨大なコレクションの一部を出展してくれた愛媛の男性、高価なおキナエビスばかりを数個持参してくれた高知の男性、そして、30年前に小学校の女の子が夏休みの自由研究で行った貝の標本作りの作品を母親が代わりに出展してくれたもの、さらには、タゴガエルの体に乗った陸産貝・ベニゴマオカタニシ（共生？移動のため？偶然付着？）の写真など、いろんな標本が集まった。

持ち寄った各自が、自分の標本について簡単に説明し、コレクションを始めた動機や苦労話、思い出などを語り、批評し合ったり、質問があればそれに答え、“みんなが主役”となって観賞した。教育普及や高知県のナチュラリストのレベルアップにも繋がればという企画者の意図もあり、和やかな雰囲気で行うことができた。



〔“三嶽古道”の道づくり—第2回“横倉山の自然案内人”養成講座—〕

〔2009年7月5日（日）；参加者：22名（友の会・越知平家会・高知遠足倶楽部）〕

平成18年に整備された、仁淀川町（旧仁淀村）谷山から横倉山（杉原神社）への旧参拝道で、安徳天皇を擁する平家一門が落ち延びて来た道とされる“三嶽古道”の再整備を行いながら、古道周辺の史跡や植物などを見学・観察する。

途中から小雨模様となったが、参加者の協力で無事今回の整備を終えることができた。



〔土佐桜石灰岩と初秋の山野草観察会—第3回“横倉山の自然案内人”養成講座—〕

〔2009年9月20日（日）；参加者：11名（内博物館2名）〕

『横倉山案内人養成講座』は、横倉山の豊かな自然環境を保全するとともに、越知町を訪れる人々にその魅力を紹介するために、横倉山の散策コースのガイドの育成を目的とした体験型講座である。

今回は、全国的にも稀で、牧野富太郎博士の発見・命名（和名）による横倉山を代表するラン科の植物「コロロギラン」を始めとする山野草の観察と、今年5月10日の「地質の日」に整備した“土佐桜”石灰岩の旧採石場跡の視察に行く。

友の会だより



「春の自然観察会

—高知県立牧野植物園見学—

〔2009年4月12日(日)；参加者：友の会会員14名(内小人1名)〕

平成20年度に開園50周年を迎え、「50周年記念庭園」にリニューアルした園内を見学。牧野富太郎博士の発見・命名による横倉山の「ヨコグラノキ」の標準木の種から10数年前から育てたという

若木が随分と大きく成長していた(写真)。

「呈茶」〔2009年5月5日(火・祝)、博物館3階テラス
協力：越知茶道サークル〕

「土佐桜」石灰岩旧採石場への道づくり ～ジオパーク
をめざして～〕〔2009年5月10日(日)；参加者：友の会
会員12名、事務局1名〕



「地質の日」に合わせた行事として、『日本の地質百選』に選ばれ、『ジオパーク(地質遺産)』をめざす横倉山に分布する日本最古の4億年前の石灰岩の旧採石場跡への道づくり

りを整備する。桜の花びらを思わせる淡いピンク色をした美しい石灰岩は、昭和40年代まで切り出され全国各地の建築用石材として使用された、越知町の歴史を語る貴重な遺産であり、生きた教材である。それを整備・保護し、後世に継承していくことを目的とする。

「仁淀川水質調べ —身近な水環境全国一斉調査—

〔2009年5月31日(日)；参加者：友の会会員12名(内小人2名)、事務局1名〕

「炭焼き体験」〔2009年6月13日(土)；参加者：友の会
会員13名、一般3名〕

「杉原神社のヒメボタル観察会」〔2009年7月7日(火)；
参加者：友の会会員7名、一般5名、事務局1名〕

小雨混じりのあいにくの天候で、ヒメボタルの数はそれほど多くはなかったが、その代わり、遊歩道沿いの倒木の枯れ木に着生していた発光キノコ「シイノトモシビタケ」が今年は多く、闇夜に青白い不思議な光を放っていた。

「皆既日食観察会」〔2009年7月22日(水)、博物館3階
テラス；参加者：友の会会員8名、一般1名、講師：片岡
重敦(元横倉山自然の森博物館館長)〕

1963年以来日本では46年ぶりの皆既日食だったが、当館では雲の切れ間から部分的にしか観ることができなかった。皆既日食帯に入っていた屋久島・トカラ列島でも悪天候で残念ながら観れなかったようである。太平洋上の硫黄島や船舶からのテレビ中継による鮮明な日食の画像は感動的であった。皆既日食を見た者は、「人生観」が変わると言う。次の皆既日食は26年後だそうだ。



「スターウォッチング —全国星空継続観察事業—

〔2009年8月18日(火)延期、8月24日(月)；参加者：
友の会会員3名、講師：同上〕

肉眼による「天の川」、双眼鏡による「こと座」の観察。

「サシバの渡り観察会」

〔2009年9月27日(日)；参加者：友の会会員6名、講師：
武田和志・橋田晃浩・橋本裕子(日本野鳥の会高知支部)〕

横倉山第1駐車場において観察。この日はあいにくの曇り空で、大規模なサシバの渡りの群れは見られなかったが、10時台に、サシバ3羽、ノスリ2羽、イワツバメが観察された。

横倉山ミニ歳時記

■「ヒナラン」再発見！

横倉山で、今年になって「ヒナラン」と呼ばれる小さなラン科の植物が、南国市の高田征幸さん(植物愛好家)によって確認されました。横倉山北斜面の林道沿いの崖の草むらの中にひっそりと咲いていたようで、とても誰にでも目に付くようなものではありません。昔はあった(記録上)がそれ以降見つかっていなかったもので、恐らく何十年ぶりかの発見だと思われます。絶滅危惧種〔環境省：IB類〕に指定されており、県内では10箇所ほどでしか確認されていません。

ヒナランは、和名は「雛のように小さくてかわいいラン(雛蘭)」という意味で、樹林下の岩上に生え、別名「ヒメイワラン」とも言います。高さ：5-15㎝で、茎は斜めに立ち、茎の下部に長楕円形の葉を1個付けます。6-7月、淡紫色の小花が10-15個、一方に偏って付くのが特徴です。

このように、横倉山では、未だに「何十年ぶりかに確認された」とかいった植物が時々見つかり、本当に「奥の深い山」だという印象を受けます。それ故、植物家の魅力を引き付けて止まない存在なのでしょう。



〔博物館日誌(抄)〕

- 3月28日(土)～6月7日(日)
春季企画展：『鳥形山系の花たち』
- 4月25日(土)
第1回横倉山自然案内人養成講座(雨天のため中止)
- 7月5日(日) 第2回横倉山自然案内人養成講座
—“三嶽古道”の道づくり—
- 7月18日(土)～9月6日(日)
夏休み企画展：『土佐の貝—その美と魅力—』
- 7月26日(日) 夏休み博物館教室〔昆虫〕
- 8月2日(日) 夏休み博物館教室〔植物〕
- 8月9日(日) 夏休み博物館教室〔工作〕
- 8月23日(日) 夏休み博物館教室〔化石〕
- 9月20日(日) 第3回横倉山自然案内人養成講座
- 9月26日(土)～11月8日(日)
秋季企画展：『土佐の野鳥たち』

〔博物館友の会「フォレストクラブ」の平成21年度活動予定〕

- 4月12日(日)
春の自然観察会—高知県立牧野植物園見学—
- 5月5日(火・祝) 「呈茶」(博物館3階テラス)

- 5月10日(日) 「土佐桜石灰岩」旧採石場への道づくり
～日本ジオパークをめざして～
- 5月31日(日)
仁淀川水質調べ—身近な水環境全国一斉調査—
- 6月13日(土) 炭焼き体験Ⅰ
- 7月5日(日) 「三嶽古道」の道づくり
- 7月7日(火) 杉原神社のヒメボタル観察会
- 7月22日(水) 皆既日食観察会
- 8月18日(火)
スターウォッチング—全国星空継続観察事業—
- 9月27日(日) サシバの渡り観察会
- 10月17(土)、18(日)〔1泊2日〕
秋吉台(秋芳洞)と瑠璃光寺(五重塔)視察研修
- 11月 横倉山への案内板設置
(ヨコグラノキ、“土佐桜”石灰岩)
- 12月 クリスマスキャンドル作り
- 1月 2010年の初日の出を横倉山で
スターウォッチング—冬の天の川・すばる—
- 2月 炭焼き体験Ⅱ
草木染教室

スタッフの声、声、声

〔西森〕 そろそろ紅葉のシーズン。横倉山にも紅葉スポットがないろうかと出かけてみた。博物館を過ぎ100mほど行ったところで、左前方の植林で何か茶色っぽいものが動いた。体は丸く尾のようなものが見える。猿、それも小猿と思ひ、角度を変えて正面から見ようと車をバックさせた。猿らしいものは、慌てて下方に去っていった。バカと思った。自分の車には、バックブザーが付いているのを忘れていた。越知でも猿の出没は時々耳にするが、こんな近くに。帰り博物館の職員に聞いてみると、何度かそれらしいものを見たことがあると言う。間違いないと思う。とんだ紅葉見物になった。

〔安井〕 9月に入ってもまだまだ残暑が厳しかったが、夕暮れ時にはツクツクボウシと秋の虫が“同居”していた。そして、気が付いてみるといつの間にかツクツクボウシは鳴りを潜めていた。今(10月)は、博物館の植え込みの中でマツムシが「チンチロリン・・・」と可愛い声で鳴いている。我が家に帰ると、3週間以上前に買って来たスズメシが仕事の疲れを癒してくれるかのように力いっぱい鳴いてくれる。虫の音に深まりゆく秋、季節の移り変わりを感ずる今日この頃である。四季折々に膚、目、そして耳で感じるいろんな日本ならではの自然や生きものがこの上なく愛おしい。日本人に生まれて本当に良かったとつくづく思う。

〔河添〕 三嶽横倉下ろしが吹き始め、南国土佐にも少しずつ冬の匂いが漂い始めました。空気はどんどん寒くなりますが、胸の内はそうでもないようです。晩秋は人恋しい季節だとか?! 真っ赤な夕焼けをみても悲しくなったり、夕日を惜しみながら家路を急ぐのも、きっとそのせいなのでしょう。付き合い始めたカップルや、「冬ソナ」ファンのあなた、横倉山自然の森博物館をお訪ねください。色好き始めたメタセコイヤ

があなたの心を暖めてくれるでしょう。その他の皆さんのお越しも、もちろん博物館はお待ちしております。私はというと、秋はやっぱり鍋でしょう! とりあえず鍋パーティーで友達を誘って食欲の秋を満喫することといたしましょう(^ ^!)

〔小松〕 小学校の1年生になった長女がお弁当のおかずにとり玉子焼きをつくってくれた。ガスレンジの前で椅子の上に立ち上がって大きなフライパンとフライがえしを持って卵を焼いているので、こわくて見ていられなかった。横倉宮でお昼に食べた玉子焼きはくるくると色もよくできていてごちそうになった。その日の“馬鹿だめし”からの眺めが気持ちよく感じたのは“親ばか”が加わったからだと思った。

〔伊藤〕 十五夜の日に秋の虫の声をききながら庭でお月見をしました。しばらく眺めていると雲が流れてきて、薄く月にかかり不思議な色合いになりました。

少し肌寒かったですが今年はとても綺麗な月が観られました。

〔小野〕 博物館で新屋まりコンサートが行われました。初めて生で聴く新屋さんの歌声と、篠笛奏者の照芳さんの笛の音が静かな夜空に響き渡りました。仲秋の名月ということもあり、綺麗な月に照らされてなんとお祭り気分を過ごせました。

《休館のお知らせ》

博物館では、外壁塗装工事等のため、平成22年1月中旬～同年3月中旬頃まで休館とさせていただきます。ご利用のお客様にはご迷惑をおかけしますが、よろしくお願い致します。

高知県越知町立

横倉山
自然の森博物館

THE YOKOGURAYAMA
NATURAL FOREST
MUSEUM, Ochi

〒781-1303 高知県高岡郡越知町越知丙737番地12
TEL0889(26)1060 FAX0889(26)0620
http://www.town.ochi.kochi.jp/

- 開館時間：午前9時より午後5時まで
最終入館は午後4時30分
- 休館日：毎週月曜日(祝日の場合は翌日)
12月29日から翌年の1月3日まで
- 入館料：大人……………500円(※各20名以上
の団体は100円引き)
高校・大学生……………400円
小・中学生……………200円
- 越知への交通
高知—JR特急約30分—佐川—バス約15分—越知
JR普通約50分

